

## ICT は英語の授業をどう変えるか

バルセロナ日本人学校（鹿角市立十和田中学校） 丸山 豊

### はじめに

国の GIGA スクール構想をふまえて、一人一台端末の時代に入った。ICT の急速な広がりにより、学校の英語教育が変わりつつある。ここでは私が ICT を writing の授業に導入して学んだことや、普段実践しているいくつかの取り組みを、生徒の感想を交えながら紹介し、今後の英語教育において必要なことを考察していく。

なお、私の勤務校であるバルセロナ日本人学校では iPad を、令和 3 年度まで勤務していた鹿角市立十和田中学校では chromebook を導入している。

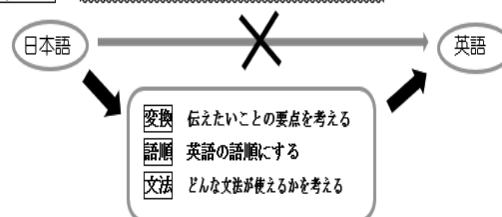
### writing の授業に ICT を ～語彙検索の指導（weblio と SKELL）～

中学校 3 年生の英語の授業において、英語で本の紹介をするビブリオバトルを行った。本の魅力をわかりやすく伝え、誰が一番魅力的なプレゼンテーションをできるか競うというものである。国語の授業でもビブリオバトルをやっていたので、教科横断的な授業として全 8 時間を年間指導計画に組み込み、英語科でも行ったのである。発表原稿を考える段階で、ICT による語彙検索を授業に導入した。

writing の授業に ICT を導入して一番初めに壁にぶつかったのが、「生徒が自分で英作文しようとする前に、すぐに日本語を検索してしまう」という問題だった。一瞬で検索できるという手軽さが、逆に弊害となってしまったのだ。日本語の文章をそのまま検索したり、長いフレーズで検索したりする生徒が多かったのである。語学学習が身につけている人にとっては、単語単位で調べるのが当たり前だが、語学初学者の中学生にとっては、まず初めに検索の仕方を身に付ける必要があった。そこで ICT の語彙検索の前に、パラフレーズ（言い換え）する技術を磨くことに力を入れた。手順としては以下のようにシンプルである。

- ①自分が表現したいことの要点を考える
- ②英語の語順を考える
- ③既習表現で言い表せないかを考える
- ④わからない単語のみを語彙検索する

英作文のコツ…日本語をそのまま英語にしてはいけない!!



例えば、ある生徒が『食欲の秋は箸が止まりませんよね。そんなときにオススメの本です』ということ英語で表現しようとしていた。そのまま語彙検索すると「食欲の秋」

や「箸が止まらない」などと調べてしまい、英語としては不自然であったり、既習表現を生かせなかったりと問題が起こる。中学生にとっては難しすぎる語彙に出会う可能性も高い。それを上の手順に従ってやると、要点である①は「秋はご飯がおいしい。」「この本を勧める」などとなる。そこで②で省略されている主語を補い、動詞と目的語や補語を考える。③では“cannot stop -ing”や単純に“enjoy”などでもよい。④の語彙検索は、あくまでもわからない単語のみである。その生徒は結局、“I really enjoy dinner every day in fall. You too? Then, I recommend this book.”と表現していた。「箸が止まらない」を“really enjoy dinner”に変換したのである。これも一つの工夫だと評価したい。

どうしても「食欲」というキーワードを入れたいというときのみ、語彙検索をさせる。すぐに検索をする前に、同じ内容を自分の力で表現できないか工夫することが大切である。その上で、検索するときは文やフレーズではなく単語単位で調べることを基本とするという、生徒の検索能力の育成が、ICTを導入する授業の成否を分ける。

パラフレーズの力が育てば、いよいよ語彙検索を生かす段階である。私の授業では、weblio を活用している。そもそも、私が英語の授業で ICT による語彙検索をしようと考え



た最大の理由は、生徒に「自律的に自然な英語を書く力をつける」ためである。今までの writing は、生徒の英文を教師が一つずつ丁寧に添削していた。生徒の作文には、文法としては正しくても、英語として自然な表現ではないものが散見されるし、それを一つずつ直していくのはとても時間がかかる作業である。

そこで、私の授業では、ICT で検索したら必ず例文と共起表現を確認するように指導している。教師に添削してもらう前に、生徒自身が多くの自然な表現を見て、それを自分の英作文に取り入れるという手法である。

例えば、「スピーチをする」をそのまま英語にすると、生徒は“do a speech”と書くが、speech を検索して例文や共起表現を見ると“give a speech”や“make a speech”という表現に出会う。こうすることで生徒が自律的に自然な英語を身に付けていくことができる。これは教師も添削にかかる時間が短くなるし、生徒の英語力向上に大きく役立つ。



このビブリオバトルの授業だが、単元の最後に生徒にアンケートを取り、どのような力がついたら実感するか調査を行った。結果として「自然な英語で書く・話す力がついた」「簡単な言葉で表現できるようになった」と回答する生徒が約半数にのぼった。「自分で自然な英語を書けるようになって自信がついた」という声もあった。また、他にも

意外な答えが返ってきた。クラスの約60%の生徒が、「英語を聞き取れるようになった」と回答したのである。理由を聞いてみると、「相手が何を伝えたいのかを一番に考えて聞くようになった」「わからない単語を聞いても、相手の意図を汲み取れば大丈夫だと思うようになった」という答えが多かった。生徒にとって満足感があつたようで、授業者としては手応えを感じる授業ができたと思う。

ちなみに、レベルの生徒には SKELL というサイトを紹介した。英語のサイトなので中学生には難しいが、この similar words という欄をクリックすると、直感的に類語を知ることができる。(右図) 自分で興味をもった単語を調べることは、生徒の語彙を広げるのに一役買ったと思う。特に現在勤務しているバルセロナ日本人学校には、CEFR で B1 や B2 の生徒も在籍しており、C1 を目指している生徒もいるので、今後も上手く活用できるようにしていきたい。



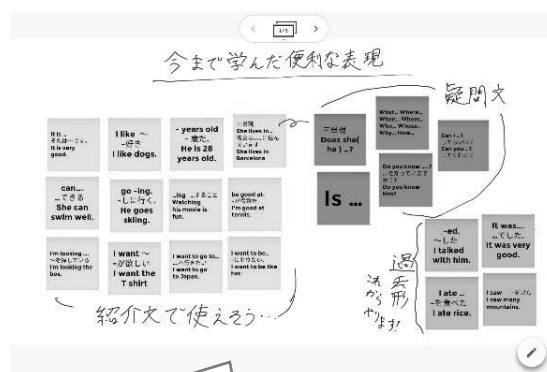
“interesting”を検索した例

### その他4つの実践の紹介

#### ①既習事項と自己表現の蓄積を ～ジャムボードの活用～

既習表現を活用しやすくするための工夫として考えたのが、ジャムボードの活用である。

新出文法や表現を学んだ際、ジャムボードに加えていくようにしている。また、生徒が自分で考えた英作文も併せて蓄積していく。自分が学んだ知識のファイルに一瞬でアクセスできる仕組みである。紙媒体のノートよりも、更新したり、再編集したりしやすいというメリットがある。また、単元の最後のプレゼンテーションなどにも活用しやすく、とても便利である。



他己紹介の時に活用した  
ジャムボード(1年生2学期)

ここでは小人数グループにより、自分にとって使いやすいという表現を書き足していくという手法をとった。このジャムボードの活用は、既習事項を活用することにつながり、有効だったと思う。

#### ②音読の宿題を主体的に ～シンプルな取り組み～

とてもシンプルな実践のひとつが音読の宿題である。今まで課題だったのは、宿題に

音読を出したとしてもその見取りが難しい点である。生徒にとっても進んでやろうとする意識が育ちにくい。そこで、自分が家で音読しているのを動画や音声で記録し、スクールワーク等で提出するという方法をとった。今まで何となく音読に取り組んでいた生徒が自分の成長を感じながら主体的に取り組むようになったと感じる。生徒同士で互いに録音してきたものを聞き合うというのも一つの手段である。以下に生徒の感想を載せる。

#### 【生徒の感想】

今までだと、どうせ先生もチェックできないし、家で音読するように言われてもやる気が出なかったのが正直な感想です。でも、録音するとなるとやっぱりしっかりやろうと思うし、前向きに取り組むようになりました。提出する前に自分の声を聞いて、おかしいところは修正しようと思うし、気がつくと自分が納得いくまで何十回も練習しています。ただ読むよりもやる気が出てくるし、前の音声を聞くと、自分でも上手くなったなと思います。

### ③発信力をつけるために ～canva と google slide の活用～

ポスターセッションやプレゼンテーションでは、canva を用いてポスターを作成したり、google slide でパワーポイントを作成したりすることが多い。google slide は共同編集が可能なので、ペアやグループで1つのプレゼンテーションを作ることも可能である。スピーチの原稿は書かなくとも、画面で見せているものがそのまま QUE となり、即興性のあるスピーチにつながった。一方、生徒が ICT の操作に慣れるには一定の時間がかかる。また、見た目ばかりにこだわり、時間がかかる生徒がいるので、計画的に進める事が大切だと感じた。



Hobby

- Playing video game
- dancing
- singing
- eating
- watching youtube / Movie

自己紹介をした  
生徒のスライド  
(中学1年生)

ポスターセッションで  
作った生徒の作品  
(中学2年生)

#### ④楽しみながら発音を鍛える ～アプリ「発音博士」の活用～

iPad のアプリで「発音博士」というものがある。自分が発音した音声に点数をつけてくれる簡単なアプリだが、生徒たちは楽しんでやっている。授業で使うことは少ないが、自主的にやる生徒が多く、楽しみながらやっている。客観的に自分の発音をチェックしたり、練習して改善したりすることができるので、それまで発音に自信がなかった生徒も自信をもてるようになったようだ。生徒からは、「勉強だけど、ゲームのように気楽にできる」「点数表記があって、わかりやすい」



「点数が上がっていくのでモチベーションにつながる」「間違っている箇所を指摘してくれるのがよい」という声があった。また、発音記号が表示されるので、自然と発音記号を読むことができるようになり、新出単語を辞書で調べたときにも、発音記号を見ただけで正確に発音する力がついてくる。



#### まとめ

一人一台端末はうまく生かすと効果は大きい。最大のメリットは自律的学習者を育てることにあると感じる。特に speaking に関しては、自分の音を客観的に聞くことができるし、自分の発表風景を動画で撮ってもらうと新たな気づきが生まれる。また、インターネットに接続すると多くの英文に出会い、reading や listening を鍛えられる機会が増える。

writing に関してはこれから解決すべき課題が多いかもしれない。ペンをもって紙に書くほうが速いこともあるし、丁寧に書く指導は紙のほうがよいと感じることもある。しかし、語彙検索による例文や共起表現の活用によって、自然な英語に出会い、自律的学習者につながっていく新たな可能性も大いに感じる。

授業に ICT を導入してみても思うところは、「ICT だからこそできることと、ICT であっても大切なこと」を精査していくことの重要性である。指導内容に応じて、どのように指導していくかをよく吟味し、指導技術を磨いていくことが大切だと改めて思った。

いずれにせよ、ICT を上手く活用して学んでいく力を生徒につけさせることは、これからの時代を生きる子どもたちには必須である。英語学習は学校教育だけでは完結しない。その先まで、学びの海に飛び込み、自分の力で深く、広く学んでいかなければならない。教師無しでも学んでいく、ICT はその道標になると思う。